"Geographie Des Odeurs" L'Harmattan, 2003, 247ページ：149～156. 2005

書　評

Robert Dulau, Jean-Robert Pitte, "Geographie Des Odeurs" L'Harmattan, 2003, 247ページ

瓜生　愛子

マルセル・プルーストの大作『失われた時を求めて』のなかで、この作品の語り手がシナノキの花のお茶をひたしたマドレーヌの味とにおいによって、幼少時代の記憶に引き戻される場面がある。祖母がくれたマドレーヌと同じにおいが、語り手の記憶を瞬時に喚起したのである。この部分は、嗅覚が強力な記憶装置であることを示すエピソードとして多く引用されている。(「マドレーヌ効果」と名付けられている。) 実際、脳に直接受け取られるにおいの記憶は、空間的・時間的な変調などがないために、非常に強い喚起力を有している。

しかし、においを知覚する嗅覚は、生理学の分野などでも、五感の中ではもっとも研究が遅れているとされている (外崎馨一『「におい」と「かおり」の正体』青春出版社, 2004年)。それは、ひとえに、においが客観的に観察したり、数値化したりすることが難しいことに由来する。しかも同じにおいであっても個々人によって好みが分かれるため、多分に主観的であるという理由も挙げられる。視覚や聴覚などは、体験した感覚を自分自身で再現することが比較的容易だが、嗅覚を再現することは大変困難であることも要因として数えあげてもいいだろう。

香水や、お香、嗅覚のシステムや、におい自体の分析といった文化的、科学的な研究は数多い。しかしながら、感性の歴史という視点から、においが社会全体に大きな影響力を持つことを解明したのは、アラン・コルバンの『においの歴史』(原著1982年出版、和訳新評論, 1988年) をもって嚆矢とする。コルバンは、18・19世紀フランスにおけるにおいについての証言を詳細に考察した。これまで、社会史や政治史によって明らかにされた18・19世紀フランスの姿に、その内面・心性にいたるまで分け入ることが可能となったのである。方法の斬新さもさることながら、これまで手をつけることがなかったにおいという対象分野を切り開くことによって、コルバンの影響は大きかった。様々な領域において、コルバンの研究を出発点とした研究が急速に開発され、いささか停滞気味であった心性の研究も急速に進みつつある。

本書は、1998年にパリ大学(ソルボンヌ)「空間と文化」研究所の「地理学と文化」叢書のうちの一書として刊行された。この研究所の所長はポール・クラヴァル教授で、人文地理学におけるアングロサクソン系の新しい動きをフランスに紹介してきた人物である。本書は、1995年、コンピエーニュ近郊のピエールフォン城で開催された学術講演会の報告をまとめたものである。本書に収録された報告は、主題とする地域も文化も多岐にわたっているが、どの報告も、においを「生きられた空間を構成する本質的に必要な要素である」ということを実証し、「においの地理学」を提唱

している。

ここで、本書の編者を紹介しておく。ロベール＝デュロRobert Dulauは、文化財管理学芸員。彼は1993年から1998年まで様々な文化的催しやエクスポジションによって生き返ったピエールフォン城（コンピエーニュ近郊にある15世紀のオルレアン家の城。ナポレオン３世が再建。）の管理者だった。彼は、「タミール地方に住む」（L'Harmattan出版）という題名の学位論文を著している。彼は、南インドの伝統的な家屋に広がる家庭的、美術的、宗教的なさまざまな実践を表現する浮遊するにおいを研究している。

ジャン＝ロベール・ピットJean-Robert Pitte：パリ大学ソルボンヌ地理学教授。彼は「空間と文化」研究所と、「地理学と文化」誌を主催している。とりわけ彼は地理学の感覚の感知しうる側面に興味を抱いている。（風景、風味、香りなどなど）。

ここで、目次と執筆者を紹介して、本書の構成を見てみる。

序論（Jean-robert Pitte）

第一部　においの地理学の基本理論

1　アンドレ・シーグフリート：1947年の礎石となる文章：においの地理学(André Siegfried)

2　においを知覚される空間の不安定さと普遍性；嗅覚の快楽主義への間文化的アプローチ(Benoit Schalal, Catherine Rouby, et. alt.)

3　においの地理学のための足どり(Jean-Franois Staszak)

4　旅行文学とにおいの地理学(Paul Claval)

5　鼓腸の歴史地理学にむけて(Roger-Henri Guerrand)

第二部　においの地理学的意義　主な文化的特徴

6　ポンディシェリのにおいの場の調査（Robert Duleau）

7　ユーラシアにおけるにおいの徴候と祝祭の空間(Lucienne A. Roubin)

8　聞香;日本におけるその作法(Sylvie Guichard-Anguis)

第三部；産業とにおい

9　近代化特有の悪臭; １９世紀パリのガス(Jean-Pierre Williot)

10　メゾン・アルフォール市のイーストのにおい(Vincent Moriniaux)

11　においの変遷と重工業と農産物加工業の急激な変化(Bernard Dezert)

第四部 都市のにおい

12　においのするパリ　ラ＝ユシェット通り界隈のにおい(Lucile Gresillon)

13　柑橘類とお香、セビーリャのにおいの地理学(Sophie Lignon-Dramaillac)

14　芳香、におい、悪臭：ブレスト地方の一覧表(Nicole Mainet-Delair)

15　ラ・ロシェルにおけるにおいの地理学によせて(Louis Marrou, et. alt.)

では、彼らが提唱するにおいの地理学とは一体なんであろうか。本書では、コルバンの圧倒的な衝撃を認めつつも、本来の地理学の中にもその出発点を見いだしている。本書の冒頭に「においの地理学」の創始者として、政治（選挙）地理学の泰斗、アンドレ・シークフリートAndré Siegfriedが紹介されている。シークフリートは、1947年パリ芸術大学で、次のように講演している。

「地理学にはいまだに研究されつくされていない領域がのこっている。においの地理学だって？いったいそこから何が引き出せるのか？これら（各国のにおいのこと）のにおい

は、何の物質からくるものなのか？おそらく、それはいくつかの主要な物質からきている。人々自身の肌のにおい、牛やラクダなどよくみかける動物のにおい、身につけている洋服の生地のにおい、料理のにおい。木造建築のにおい、樹木のにおい、海風やそのほかもろもろのにおい。結論的に言えば、ある文明や地方に対応する臭いの領域は、一方のにおいの領域から他方の領域に移動するとき、その境界に即して存在している。たとえば、カイロ（アラブ風の香水、通りのラクダのにおいは、インドの気配を告げている）コンスタンティノープル（ロシアの気配を告げているトルコ風の香水のかおり）マルセイユとでは、においは同一ではない。この３つの都市は、地中海を取り囲む共同体に属しているにもかかわらず。においの地理学は、われわれに境界の観念を理解する上でよりよい助けとなる。ひとつの地方から別の地方へと通り過ぎたと感じさせるのは、まさにあるにおいをかいだ時なのである。まさにこの通過の重要性がある。遥か彼方の一陣の風に乗って、我々の方へ、オリエント、地中海、アジア、アフリカがやってくるのも、まさにこのようにしてなのである。(pp.20-23)」

しかしながら、このように重要な概念であるはずの「においの地理学」が、長い間にわたって等閑に附されてきたのはなぜであろうか。本書序文で、ジャン＝ロベール・ピットは、次のように説明している。

「このテーマは風変わりなように思われる。どんな主題の地理学も存在するというのだろうか。たしかに、疑いもなく存在する。

ある場所を個別化することに貢献するものはすべて、空間の中で分かち合っているものすべては、具体的現実に関係するものであれ、表象に関係するものであれ、すべてが、地理学的に分析する対象になりうる。」ピットは、このように言ってにおいの地理学を提唱する。しかし、嗅覚に基づく地理学は困難をきわめている。なぜならば、その他の感覚と違って、嗅覚は、常になおざりにされてきたからである。

「地理学者は世界を理解する方法の中では、視覚以外の他にはほとんど注意を引くことはなかった。それは、精神と肉体は正反対のものであり、感覚と理性は和解できないとする西洋におけるピューリタニズムと公衆衛生学の結果なのだろうか。そんなことはない。しかし、他の４つの感覚は、こんな侮辱を受けてはいない。知覚のあいだで、においだけが名前を持たない。固有の語彙をもたない。無秩序なままである」。このように指摘しながらも、その理由を十分に説明しているとは言いがたい。

ポール＝クラヴァルは、「旅行文学とにおいの地理学」という報告の中で、この点を理論的に解明している。クラヴァルは、地理学者と旅行家という相似ていながら、異なった軌跡を描いている人々を取り上げることによって、においの地理学の特異性を解明している。旅行記をテーマとしている評者は、クラヴァルの立論に共感を覚える。

「地理学研究の大部分は、においを無視している。その理由は、様々である。あるものは、好きなように地理学に明確な科学的地位を保証しようとする。視覚は、より客観的な立場を保証しようとする。嗅覚は、それに当てはまらないということを綿密に語る方が容易である。・・・旅行者は、自分の経験を語るので、このような抑制に耐えられない。彼は生きられた経験を語り、具体的な場所を語り、ある一般化を説明するような空間の組織化の事実については語らない」とする。クラヴァルに

よると、においが旅行記の中でも、18世紀以降からしか明確にならなかったテーマであるとする。植物学や博物学が未発達であったと同時に、嗅覚自体が分子の感覚能力の一つであるからである。「１つのにおいが、７つの基本的なにおいによって構成されることがわかっている。樟脳、じゃこう、バラのような花のにおい、つんとくるにおい、あるいは腐った卵のような腐敗臭。においの世界は７つで構成されているが、これを指し示している７つの言葉は、受容された印象の豊かさを説明するには十分ではない」からである。カルチエ、ブーガンヴィル、フンボルト、コンダミンヌ、セガレン、モンテーニュ、シャルダン、サンピエールなどの旅行記を引用しつつ、地理学と旅行記の違いを解明する。その上で、クラヴァルは、地理学においては視覚による経験が縮尺可能であるから、空間を把握する上で重要な手がかりとなる。それに比べ、嗅覚による経験は一時的なものであり、相互に異なるにおいの間での還元が不可能であるから、空間を構成する要素でありながら、においが従来の地理学になじまなかったことを指摘している。さらに、「嗅覚の経験は、すでに、類似した知覚を記憶の中に刻み込まれている人との間でしか、伝達が不能である。せいぜい、人間の精神の中で、嗅覚の経験が結合されている諸要素を通じて、それが喚起されうるのである」として、嗅覚の持つ固有の困難性を指摘し、地理学の中でにおいが定着しなかった理由を説明している。しかし、同時に、「どの国民もよいにおいと悪いにおいを区別するが、彼らがこの区分をおこなうやり方は、どこでも同じわけではない。我々が堪え難いと考える度合いは、均一ではない」ので「においとそれを受容するやり方は、諸文化の間の差異を把握する本質的な標識である。その研究は、同様に諸集団の機能の仕方における嗅覚的メッセージの役割をも明らかにする」のである。この指摘は、旅行記を読み解く際にも重要な視点である。

しかし、クラヴァルの理論的解明を諒としながらも、若干の不満は残る。それは、ある社会集団、ある文化に関して、においの差異を根拠として、一方の側から他方の側へ蔑視・差別するまなざしが形成されることには触れていないことである。においが再現不可能に近いため、異なったにおいの空間を叙述する際、蔑視・差別へ誘導する説明は、容易に蔑視のまなざしを形成する。それを検証し直すことが不可能であるから、このまなざしがいったん形成されると解消不可能になるということを指摘しておかなければならない。19世紀後半から、数多くの旅行記が出版されたが、その中で、アジアの諸国に関する記述は、におい、特に悪臭に言及することが多かった。その説明のキーワードとなったのは、ミアスム（瘴気）であった。西洋においては、ミアスムを公衆衛生・医学の発達によって駆逐したが、アジア、特に中国にはミアスムが満ち満ちている、という記述は、西洋の側のアジアに対する視線を確定するに十分であった。「においの歴史」には、この視点は萠芽的に存在するが、「においの地理学」には、見られない。これ自体が研究の対象にもなりうると思われる。

評者がこの本を書評の対象としたのは、評者が「においとアジアへのまなざしの形成：19世紀の旅行記を通じて」をテーマとしているからである。19世紀後半、デュレやボーヴォワール伯爵など東洋へ旅行した人の旅行記が多くのフランス知識人・芸術家によって読まれた。パリ万国博や日本の美術品の大量流入とも相まって、フランスには「ジャポニスム」

という現象が出現した。数多く出版された旅行記は、ジャポニスムをかき立てた（ヨーロッパの旅行社の旅行記は、アンソロジーとしてN.Boothroyd, M. D_trie, Le Voyage en Chine, R.Laffont,1992. P.Beillevaire, Le Voyage au Japon, R. Laffont, 2001.に収録されている）。さらには、ジャポニスムは印象派の形成に大きな影響を及ぼしたと言われている（ゴンクール『日記』1884年４月19日「印象派全体は、日本の明るい印象に対する観想と模倣とから生じた。」）。これらの旅行記では、異口同音に、中国の不潔さと悪臭、日本の清潔さが強調されている。ヨーロッパでは、18世紀まで、長い間にわたって中国に対して高い評価がなされてきたが、19世紀に入ると一気に失墜してしまう。それに伴い相対的に日本に対する評価が上昇した。まさに「現場で」見たことを読んだ読者には、中国の優位性が否定され、日本のすばらしさが刻印され、ある種の価値のヒエラルキーが形成されていったのである。評者は、これらの旅行記を通じて、フランスにおけるジャポニスムの形成を研究してきた。特にデュレの旅行記は、日本、中国、ジャワ、インドという広大な領域を旅行した結果を記録したもので、非常に興味深い資料である。

本書に収録された論文は、においという要素によって空間が決定されていくという重要な視点を提供しているのみならず、デュレやボーヴォワール伯の旅行体験の限界、すなわち、一時的なにおいの有無によって、その地、人々、文化を評価することがいかに誤りやすいか、ということを照射してくれている。本評においては、デュレの軌跡とあわせる意味で、19世紀のパリ、日本における香、インドポンディシェリのにおいの空間を取り上げてみて、その有効性を検証してみる。

「近代化特有の悪臭：19世紀フランスのガス」という報告では、近代化にともなって生じた製造ガスのにおいに対するパリやその周辺住民たちの様々な反応、ガス製造会社の努力や訴訟沙汰を通して、においに対する都市住民の新たな意識変革を垣間見ることができる。

18世紀末、ヨーロッパ諸都市では近代的工場が建設され、これに伴った新たな悪臭公害が発生した。フランスの首都、パリでは下水施設の整備によって糞尿のにおいは消えていった。同時にこのことは悪臭は不快であるが生活にとっては「避けられないもの」から、受容出来ない、根絶の対象にとって代わっていったのである。

都市空間を一変させたガスもまた新しい進歩の象徴でありながら、その製造過程によって生まれる新たな悪臭とその製造現場は非難や中傷の的となった。既に病気の根源は悪臭ではなく、病原菌であることは証明されていたが、同時に個人の衛生観念も大きく変革していたからである。

実際にガスの恩恵に浴することができたのは、安全な換気装置が配備された住宅に住める中・上流階級のみであり、彼らは「その社会的地位を位置づけるこれみよがしのしるし」を新しい贅沢として住宅の中に取り込んでいった。論者によると1880年、中心地区のガス利用者は７人に１人であるのに対して、パリ周辺地区は34人に１人という低い割合になっている。この分布図は、低所得者層がオスマン化によって地価の高騰した中心部から課税額の低いパリの環状部へ追いやられた結果生まれた「ふたつのパリ」の図と重ね合わすことができる。

上・中産階級は、室内に浴室を設け、換気設備を整えるなどして、入浴が健康に害するという前世紀のしがらみから解放され、自ら

の体や居住空間を洗い清めていった。一方で、労働者階級は旧態依然のままに悪臭や体臭にまみれている。自らの脱臭をし遂げたブルジョワ達はさらに周辺領域の悪臭に敏感になっていく。

首都にガスを供給する製造工場の分布が、ある時期を挟んで二分されたことは、このブルジョワ達の要求と無関係ではないといえるだろう。1820年から1855年に、稼働していた８つの工場のうち３つはパリ市内に建設されていた。ところが、1855年以降、立て直しを理由に、３つの工場は取り壊されてしまう。その後、ガス製造工場は、ラ・ヴィレット(1856-1857)、クリシー（1878-1881)、パリ北部（1889-1892）などのパリの周辺地域に建造される。そして、収用地の拡大には、悪臭を抑制するという条件付きで当局の認可が必要とされた。製造場所たる工場周辺の悪臭がどれほどひどいものであったかは、1845年ベルビルの工場付近の48人の地主による告発文でも明かである。「この種の産業の絶え間ない煙と避けられない悪臭は、借家人に彼らの家の窓を開けられないようにしている原因である」。この工場建設地は、ことごとく前述の低所得者層の多く居住するパリ郊外にあたることは、けっして偶然ではない。都市の美化・衛生のために、耐え難い悪臭の発生源は周辺地域に追いやられたのである。

論者が最後に述べているように、悪臭に対する告発文書は、ガス製造工場の建設がパリ周辺に限定されたという事実、悪臭に苦情をあらわにする周辺住民の嗅覚の変革が如実に表されている。

「オスマン化」による都市の美化・衛生化、ブルジョワの街と労働者の街の「二つのパリ」の成立が、空間に充満するガスという新しいにおいを取り上げることではっきりと表されたユニークな論文である。また、デュレが生きた空間は、まさしく脱臭された都市だった。彼にとって、においは忌むべき、排除の対象として位置づけられただろうことがうかがい知ることが出来る点でも、評者にとって大いに意義のある内容である。

「聞香」

ここでは、古代から現代まで続く日本における香道の歴史と、現代も行われている香道の実践、香席での作法などが詳細なレポートによって、文化としてのにおいの役割が報告されている。

日本における香の歴史は、６世紀にまで溯るという。「日本書紀」によると、淡路島に流れ着いた香木が推古天皇に献上されたことが最古とされる。日本に、仏教が伝えられた際に、香木ももたらされた。当初、香は仏前を清めるための仏教儀礼の道具として用いられていた。

奈良時代以降、貴族達は仏の供物である香を、住居や着物に薫きこめる習慣を生み出していく。創意工夫して、様々な調合を行う「薫物」は、平安貴族達の嗜みとして、その人の美的感覚や、教養をうかがい知るための最適の表現方法であった。論者も、「多くの文学的逸話が、夜の暗闇のなかでも、訪問者はその着物から放たれる香りによって身元を明らかにすることが出来ることを証明している」としている。香りが個人を特定する手段になったことが窺い知れる。その後も日本人は様々な方法（一本の沈香を嗜むことや、異なった香りをかぎ当てる競技である「組香」など）で、香りを嗜んでいく中で、香は芸道として発展していき、現代まで伝統文化として引き継がれていったことが分かる。その使用は、「数世紀を経る中で、多様化して」いる。

現代日本で、部屋や身体の「嫌な匂い」を消すための消臭剤や芳香剤が大量に宣伝され消費される一方で、茶道や華道のように家元を擁した芸道として香りが保存されていく姿が描き出されている。体臭や腐敗臭は生活から排除される一方で、華道や香道と同じく香りを通して「自然」を喚起させる美としての匂いは引き継がれていく。これは、においが強く発散される条件である湿気を多分に含む日本の地理的風土と無関係ではないと思われる。とまれ、日本が香りを文化として持つ稀有の国であることがこの報告から窺い知れる。しかし、これは、まさに、デュレ以来営々としてくり返されている「日本＝清潔」というステロタイプ化されたパターンの再版となりかねない。

「ポンディシェリにおける『においの場』の探求」

においは、意味の担い手であって、ある場所の活動とアイデンティティを知らせることができる。そのことについて、ルーバンは「嗅覚の特権的な場」つまり「ある場所に定立された諸活動に依存するにおいの喚起の束を示し、人間がそのライフスタイルの中で維持している行動様式・感性の諸形態を明示している」としている。しかし、においを文化的構成要素として感じるためには時間がかかる。フランスの旧植民地であったインド東岸のポンディシェリは、海に面し、雨期・乾期、湿度の高さ、年間最高気温の差が小さいという気候条件によって規定されている。熱帯植物の発する強烈なにおいは、雨期に入るとさらに強くなる。これは、においのネットワークとも呼べるものを形づくる。さらに、このネットワークに日常生活のにおいが加わる。まず、毎朝６時頃、女主人、乳母、女中、下女が戸口に行き水をまく。さらに戸口に幾何学的模様Kolamを描き出す。その際、打ち水、模様書きに使う水には、ゴミ、牛糞が混ぜられている。ここから発する強烈なにおいが、家庭、地域共同体の目印を形成している。さらに、街路は、放し飼いの牛、水牛などが往来し、いたるところに止まり排泄する。人々は、この糞を乾燥させ、燃料とする。さらに、街路には、ゴミが定期的に収集されないこと、街路居住者が排出する生活ゴミが山祇になっていることから、ゴミの強烈なにおいが覆っている。また、街路樹に強烈なにおいを発散する植物が植えられ、人々の身につけているココナツヤシ油のにおいが充満している。これに、コーヒー屋台のにおい、モーター・リキシャの排出ガス、火葬のにおいまでが加わり、巨大なにおいの空間を形づくっている。

デュロは、ポンディシェリに居住しつつ、この町の様々な側面を観察してきた。その結果、単に家屋内のにおいの共同体のみならず、都市全体のにおいのネットワークに気づき、特有のにおいがその都市のアイデンティティを形成していることを指摘している。

一方、日本、中国、ジャワ、セイロンと就航してきたデュレも、ポンディシェリを訪問している（1872年9月）。しかし、その旅行記には、ポンディシェリのにおいには、全く触れていない。デュレは、中国旅行において、口をきわめてその不潔、悪臭、ミアスマを叙述していたが、ポンディシェリでは、むしろイギリスの植民地統治に比べて、フランスの植民地統治の優位性を説いているほどである（Duret, Voyage en Asie, pp.265-270）。においに言及しなかったのは、アジアにおいて通例であると感じるようになったのか（日本をのぞいて）、気候的条件がにおいを強く感じさせなかったのか、その点は不明である。

本書は、地域、時代、においの種類などに

関する、実に種種多様なテーマの論文集である。そのため、本書の意義としては、全てを包括した結論を導き出すというよりは、その多様さこそがにおいの位相や普遍性をあらわしていると考えることができる。論者たちは、実に多様な主題、フィールドを扱っているので、その中から自分の興味を引きつける主題を選び出す楽しみにも溢れている。

本書は、地理学的アプローチによって、社会・文化集団や、都市空間を構成する重要な要素として、においが存在するということを体言してくれる大変画期的な良書である。この本によって従来、客観的な要素によって体系づけられてきた人文地理学に、感性に基づく空間研究というあらたな面をつけ加えることになると思われる。今後、国内においてもこのような観点からのにおいの研究書が発行されることを願ってやまない。